



教皇様の聲

5

229号

Libreria Editrice Vaticana, Citta del Vaticanoの転載許可済 ©1999

イエズスが赦しの秘跡を制定された

(3月13日、教皇様は、教皇庁内赦院の面々とローマ市内の主立った大聖堂の聴罪司祭たち、また、内赦院主催の黙想会に参加した司祭と神学生の一団に向かって、赦しの秘跡についてのお話をされた。)

★ (…) このような集いはとても意義のあるものです。赦しの秘跡によって和解の務めを果たす司祭の役務と、ペトロの聖座とのつながりを明白な形で確認させてくれるからです。キリストが包括的な言い方で、権能と義務と責任とそして同時にカリスマを(こちらは私の兄弟である司教団とその協力者である司祭にも及びますが)委ね、悪の力すなわち罪と悪魔から靈魂を解き放つ権限をお与えになったのは、ペトロとその後継者たちに対してではなかったでしょうか。

教会は普遍の救いの秘跡

★ (…) 大聖年には、調和を保ちつつも多様性に富んだ、様々な要素と目標がありますが、中心になるのは何よりも心を改めること、「メタノイア」です。イエズスの公生活も、福音書によれば改心への呼びかけで始まったのでした。(マテオ1・15参照) すでに旧約聖書では、悔い改める人に救いと生命が約束されています。「私が悪人の死を喜ぶだろうか、と主は仰せられる。むしろ、彼がその生き方を変えて生きることをこそ喜ぶ。」(エゼキエル18・23) 間近に迫った大聖年は、死刑の宣告を受けた時、ピラトに向かって「私は真理を証明するために生まれ、そのためにこの世に来た」(ヨハネ18・37)と言われたイエズスの生誕後二千年期の終わりを記念します。イエズスが証明した真理とは、彼が世を救うために来たことです。さもないければ世は滅びに至ったでしょう。「人の子は見失ったものを尋ねて救うために来た。」(ルカ19・10)

新約聖書の救いの経緯によれば、主は教会が救いの普遍的秘跡であることをお望みになりました。第二バチカン公会議は、「教会はキリストにおけるいわば秘跡、すなわち神との親密な交わりのしるしであり道具である」(教会憲章1番)と教えています。神のみ旨

は、罪の赦し及び神との友愛の回復が、教会の行為を通じて行なわれることです。「あなたが地上でつなぐものはみな天でもつなぐれ、地上で解かれるものはみな天でも解かれる」(マテオ16・19)とイエズスはおごそかにシモン・ペトロに向かって、また彼を通してその後継者である教皇たちに対しても仰せになりました。またイエズスは同じ任務を使徒たちと、彼らを通してその後継者である司教たちにもお与えになりました。「あなたたちが地上でつなぐものは全て天でもつなぐれ、地上で解くものは全て天でも解かれる。」(マテオ18・18) ご復活当日の夜、イエズスは聖霊を注いで、実際に罪を赦す力を与えます。「あなたたちが罪をゆるす人にはその罪がゆるされ、あなたたちが罪をゆるさぬ人はゆるされない。」(ヨハネ20・23) 以後、この命令をもとに、使徒とその後継者たちは謙遜と真実をもって言うことができるのです。「私はあなたの罪を赦します。」

大聖年が救いの歴史の中でもひとときわ実りある時となることを私は信じて疑いません。歴史の頂点と究極の意味はイエズス・キリストにあり、キリストにおいて私たちは皆「恩寵の上にさらに恩寵を受けて」(二千年の大聖年公布の大勅書『受肉の秘義』1番)、御父と和解します。そこで私は、聴罪司祭たちの寛大な奉仕を通して、大聖年が熱心でしかも超自然的に静穏な、和解の秘跡への参加の機会となることを信じ、祈ります。

完全な痛悔であるためには、
罪の告白を含むべき

★ この点に関して、皆さんは「カトリック教会のカテキズム」が基本テーマとして取り上げ、綿密な分析を行なっているのをご存じでしょう。しかし

この場では、いくつかの本当に大切な点について思い起こしていただきたいと思います。皆さんに委ねられた信者たちにも必ず教えるべきことです。

—先に上げたヨハネの福音書で明言されているように、主イエズス・キリストの制定による秘跡としての告白は、洗礼後に犯した大罪の赦しを得るために必要です。しかし、もし罪人が聖霊の恩寵に動かされ、超自然の愛の心から罪を悔いるなら（と言うのも罪は究極の善である神に反する行為ですから）、大罪であっても、しかるべき期間中の出来るときに秘跡としての告白をする意志がある限り、その人は即座に罪の赦しを受けることができます。

—重大な罪を犯して、聴罪司祭への個別の告白をせずに一般赦免を受けた人の場合も同じです。告白する意志はぜひとも必要で、教会法に定められている通り、それがなければ赦しは無効になります。

—小罪も秘跡としての告白なしに赦されることが可能です。しかし、秘跡として告白することがこの上なく有益なのは言うまでもありません。告白する人が適切な心構えを持っている限り、罪が赦されるだけでなく秘跡の恩寵による特別な助けが得られ、以後の罪を避けることができるのですから。ここで、信者の有する権利（小罪だけであっても告白して赦しを受けられる）と、それに関連する聴罪司祭の義務を確認し直すのがよいでしょう。「信心の告白」と呼ばれるものが偉大な聖人たちを育てたことを忘れてはなりません。

—大罪を犯したことを自覚する人がご聖体を合

法的・効果的に拝領するためには、先に秘跡としての告白を済ませていなければなりません。カルワリオでの救いの犠牲の再現である聖体は、実に全ての恩寵の源ではありますが、秘跡そのものは、直接に大罪の赦しを得させるために制定されたものではありません。これについてはトレント公会議ではっきりと述べられています。（第13総会、第7章と関連する教会法、『カトリック教会公文書資料集』1647,1655）これは、言わば神のみ言葉自体に規律的・法律的な性格を与えたものです。「ふさわしい心なしに主のパンを食べその杯を飲む者は、主のお体と御血を犯す。そのパンを食べその杯を飲むごとに、各自自分を調べねばならぬ。主のお体をわきまえずに飲食する者は、自分自身へのさばきを飲食することである。」（Iコリント11・27～28）

★ このように、赦しの秘跡の力によって、大聖年は大いなる赦しと完全な和解の特別な年となることでしょう。和解を望まれる神に感謝し、私たちも神との和解を希望しますが、その神は御父です。私の御父、信じる全ての人の御父、全人類の御父なのです。ですから、神との和解は必然的に兄弟姉妹との和解を必要とします。それがなければ神の赦しは受けられないでしょう。イエズスが「我らの父」への祈りでお教えになったように。「私たちが人を赦すように、私たちの罪をお赦し下さい。」赦しの秘跡は、気高く寛大で行動力にあふれた兄弟愛を前提とし、それをつちかうものです。（…）

（1999・3・13）

父である神の愛を映す 聖ヨセフ

親愛なる兄弟姉妹の皆さん。（…）祝された処女マリアの夫ヨセフは、全教会の守護聖人であり、神の民の間で特別の崇敬を受けていることは、多くのキリスト信者がヨセフの名をいただいていることで明らかです。十年前、私は聖ヨセフに捧げる使徒的勧告を表わし、贖い主と全教会の守護者としてのその使命を考察しました。大聖年の準備として御父に捧げられた今年、もう一度皆さんと共に黙想してみたいと思います。人となられたみことばの、地上での父として召された聖ヨセフの姿には、神の父性が最大限に反映されているからです。

ヨセフは実際にマリアの夫でしたから、イエズスの父です。マリアは神の御力によって、処女のまみごもりでしたが、その子はマリアの正当な夫であるヨセフの息子でもありました。福音書の中でヨセフとマリアがイエズスの「両親」と呼ばれているのは、そのた

めです。（ルカ2・27,41）

父としての務めを果たすことで、ヨセフは時が満ちるに及んで、偉大な救いの神秘に力を貸しました。（『救い主の守護者聖ヨセフ』8番参照）「彼の父性は具体的に…受肉の神秘そのものとそれに密着した贖いの実現のために、その生涯を奉仕の生涯にしたことによって、…家庭愛への人間としての召命を、自分自身、その心、および全能力の超人的な奉獻にまで高め、また、それを自分の家に生まれたメシアへの奉仕に専念する愛に変えたことによって表明されました。」（同）

この目的のため、神はご自分の父としての愛にヨセフをあずからせられました。「父から天と地のすべての家族が起こったからである。」（エフェソ3・15）

全ての子供と同じく、イエズスは人生について、振る舞い方について、両親から学びました。人間としてのイエズスが御父のみ旨への完全な服従に至ることが

「ナザレトのマリア」……フエデリコ・スアレズ著 本体価格一、九四二円
キリストに倣う最上の方法は聖母に倣うこと。聖母マリアほど御子のイメージを忠実に再現した人はいない……では、マリアはどのような方で、どのような生涯を送られたのでしょうか？ 著者は、歴史学者の正確な目と深い信仰をもつて聖母の生涯をたどりま

できたのは、「正しい人」(マテオ1・19)であった父ヨセフの模範に倣うことによってであったことを考えると、深い感動を覚えずにいられません。

今日、私は全ての父親と家庭生活における父の務めのために、天の聖ヨセフの保護を願いたいと思います。また、教会という家族の中で、霊的・司牧的な父の務

めを任された司教と司祭たちをもヨセフに委ねます。忠実に自らの責任を全うすることによって、一人ひとりが神の配慮ある忠実な愛を映すものとなれますように。聖ヨセフと、家庭の元后・教会の御母である祝されたマリアの助けに依り頼みます。

(1999・3・21、お告げの祈りの時のお話)

神は御父であることを示される 「父である神」シリーズ 3

1 前回すでに言及したように、イスラエルの民は父である神を体験しました。他の諸民族同様に、誰もがもつ地上の父に関する経験から、神の中に父を感じ取ったのです。何よりも、とりわけ父らしい態度を神のうちに見出しましたが、それは神の特別な救いのみわざを直接に知ったからでした。(カトリック教会のカテキズム、238番参照)

最初の視点、人類の普遍的な経験という点から見ると、イスラエルの民は神の父性を、生命の創造と更新という不思議を通して認めました。母の胎内で子が形作られる神秘は、詩編作者が言うように、神の介入なしには説明が付きません。「あなたは私の腎をつくり、母の胎内に織り込まれた。」(詩編 139<138>・13) さらにイスラエルは公の、特に宗教上の役目を担った人々、たとえば祭司(判事の書17・10、18・19、創生の書45・8参照)や預言者(列王の書下2・12参照)のように、父と見なされていた人々との類推によって、神を父として見たのです。イスラエル社会が父祖への敬いを重視する社会だったことを考えれば、ユダヤ人が神を厳しい父として見るようになったことはたやすく理解できます。事実、モーゼの律法は両親を敬わない子らにははなはだ厳しく、父母を打つ者や呪う者には死刑を命じていたほどです。(脱出の書21・15、17参照)

神はイスラエルを長子とされた

2 しかし、こうした人間的経験による認識を超えて、さらに的確な「父である神」のイメージは、イスラエルにおける神の救いの介入を土台にして発展していきました。神はイスラエルをエジプトでの奴隷状態から救い出し、御自身との契約関係に入るよう、さらには神の長子とされたと考えるよう、お招きになりました。こうして神が御自身を独自の方法で父として示されたことは、モーゼに与えた御言葉からも明らかです。「ファラオに伝えよ、主はこう仰せられる、イスラエルは私の長男である」と。(脱出4・22) 長子であるこの民は、絶望の時でも子としてのこの優れ

た資格で神を呼び求め、脱出の書の奇跡を新たに期待することができました。「主よ、み名をもって呼ばれる民、主の長男とされたイスラエルをあわれみたまえ。」(シラの書36・11) こういうわけで、イスラエルは自らを他の民から区別する律法を守らねばならず、自分たちが特別に享受している神の父性を証ししなければなりません。第二法の書は、旧約に発する約束をもとにこのことを強調しています。「神なる主にとっておまえたちは子である。…おまえは主に聖別された民である。この地上にある全ての民のうち特におまえを主は自分の民として選び出された。」(第二法の書14・1以下)

イスラエルは神の法を守らず、子としての身分に反する行動を取ったため、天の御父の叱責をこうむりました。「彼らは自分をつくりたもうた神を見捨て、自分の救いの岩を軽んじた。」子としての身分はイスラエルの民全員に及ぶものですが、ダビドの子孫と後継者たちには独自の方法で適用されます。ナタンの有名な預言の中で、神は仰せになりました。「私は彼の父となり、彼は私の子となろう。」(サムエルの書下7・14、歴代の書上17・13) この予言に基づいて、伝承は救い主が神の御子であると確言しています。「おまえは私の子である。私は今日、おまえを生んだ。」(詩編2・7、110<109>・3参照)

3 イスラエルに向けられた神の父性は、強く、変わる事のない、憐れみあふれる愛を特徴とします。民の不忠実とたび重なる叱責にも関わらず、神は愛さずにはいられない御自身を示します。そして、子供たちからの答えがないことを嘆かずにいられない時でさえ、深い優しさを示されました。「私はエフライムに歩くことを教え、腕に抱き上げた。私が見取っていることを、彼らは知らなかった。やさしい網で、愛のきずなで、私は彼らを引いた。幼い子を育てるように、彼らの上にかがみこみ、食べ物を与えた。…エフライムよ、どうしておまえを見捨てられようか？イスラエルよ、どうしておまえを渡せようか？…私の心は思い乱れて、はらわたは、うちふるえる。」(ホゼア1

1・3以下、エレミア31・20)

叱責さえも特別な愛の表現であったことは、格言の書に説かれている通りです。「わが子よ、神のこらしめをあなどらず、神のこらしめを受けて悪意を抱くな。なぜなら、神は愛するものをこらしめ、いちばん愛する子を苦しめたもうからである。」(3・11~12)

主である神は、永遠に私たちの父

4 こうした神の父性は、その表われ方において非常に「人間的」であると同時に、ふつう母の愛に見られる特徴をも全て含んでいます。数こそ少ないものの、旧約聖書の中には神が母と対比されている非常に重要な個所があります。たとえばイザヤの書では、「シオンは言った。『主は私を見捨て、私を忘れら

れた』と。女が乳飲み子を、母がふところの子を忘れようか。よし忘れる者があっても、私は忘れない。」(49・14~15) また、「母が子を慰めるように、私はおまえたちを慰める。」(66・13)

このように、神のイスラエルに対する態度も母の特徴を帯びて表われ、慈しみと理解を示しています。(カトリック教会のカテキズム、239番参照) 民の上に豊かに降り注がれる神の愛を見て、老トビアは宣言しました。「イスラエルの子らよ、主は異国の民の中にあなたたちを散らされた。彼らの前で主をたたえよ。そこにおいて主の威厳を告げ、すべて生きる者の前で主をあがめよ。われらの主、われらの神、代々のわれらの父を。」(トビア13・3~4)

(1999・1・20)

教皇さまの動き

●4・11 ローマ市内の教会でのミサで、教皇さまはコンボとバルカン半島のため、新たな平和の呼びかけを行なわれた。「耳にするのは暴力と死のニュースばかりですが、私たちは平和への望みを捨てたくはありません。」また、教区民に向かって「今日の集いが皆さんにとって、神の道をさらに遠くまで進むための良き機会となりますように。常に神のみことばに養われ、秘跡に強められ、どんな環境や状況のもとでも真の福音の証人となることを特徴とする、堅固なキリスト教的生活によって。」ローマ市内福音宣教に関して、「多くの人が真にキリスト教的な生活を願っています。適切な霊的指導によってこの願いを励まし、支えなければなりません。隣人たちの期待や疑問を考慮しつつ、このすぐれて使途的な経験がつかの間のものに終わらぬようにするのは皆さんの役目です。」

●同日、レジナ・チェリの祈りの前に。「復活祭から八日目に当たる今日は、神の憐れみの日曜日と呼ばれています。個人としても教会としても、〈主の霊は私の上にある…主の恩寵の年を告げ知らせるために送られた〉というイエスの言葉に従い、まことの聖年の精神に近づくための特別な機会です。」「本日の典礼に響き渡る憐れみと赦しへの招きと、バルカンでの悲劇的な紛争の暴力と流血の間には、何とひどい落差があることでしょうか。どうか平和を！信仰ばかりでな

く何よりも理性の面から、平和の訴えを繰り返します。人々が平和共存できますように。武器が沈黙し、対話が再開されますように！」

●レジナ・チェリの祈りの後、聖ペトロ広場に集まった人々へ。「本日は正教会で復活祭が祝われる日です。私も喜んで、正教会の兄弟たちの祈りに加わりたいと思います。」「復活の主が弟子たちに約束された平和が、常に信者の間にありますように。この瞬間にも私の思いは戦争で苦しむ人々のもとへ向かいます。困難と試練の中でも平和の希望が彼らを支え、お互いを敬いつつ兄弟のような連帯に満ちた平和共存を築くための力となりますように。」

●4・14 本日の一般謁見のテーマは「父である神の証人：キリスト者から無神論者への答え」であった。「宗教心が生じるのは、人間が被造物であって、ご自分に似せて人間を造られた創造主にあこがれるからです。」「歴史が示すように、無神論は寛容を欠くイデオロギーとなり得ます。過去二世紀、理論づけられた無神論が神を否定し、人間および自然や科学の絶対的な自律を宣言しました。そして神を排除すれば人間はもっと自由になれるという偽りを吹き込んだのです。」「教会は宗教の心理的・社会的な研究を軽んじません。しかし、宗教性を人間心理の投影あるいは社会状況の結果として考えることは断固拒否します。」

「教皇様の聲」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円(税込)

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-31-3452・FAX. 0797-31-3448

振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会

●「教皇様の声」では、スペインの週刊紙「アセプレンサ」に掲載された回勅の要約を訳して、何度か読者にお届けしたことがありました。同紙の記事の中から興味深いものを訳して希望者に提供してみたところ、「教皇様の声」の読者にも何らかのかたちで提供することはできないかという声が多くなってきました。そこで今回から時々、できるだけ今日的な内容のものを選り、〈付録〉の形でいくつかの記事をお送りすることに致しました。本文の教皇さまご自身のお話とともにご一読いただければ幸いです。御意見がありましたらどうぞお寄せ下さい。

(編集部)

路上の暴力：生命軽視の裏側

去る10月4日に地方新聞協会のインタビューに答えて、オランダ教会の第一人者アドリアヌス・シモニス枢機卿は同国で頻発している路上の暴力事件の原因に関する考察を発表した。最も凄惨な事件の一つがこの9月に起こった。一人の青年が川に自転車を投げ込んでいた不良グループに言葉で注意したところ、彼らが有無を言わず青年に暴行を加え、殺してしまったのである。葬儀は青年の結婚式が挙げられるはずだった日に行なわれた。国中がこの残酷で寒気をもよおすような事件に驚愕したのである。

インタビューの中で枢機卿は、この事件を法の下に堂々と行なわれている殺人と関連づけて言った。「私たちの住んでいる社会は、最も基本的な人権、つまり生きる権利が侵されている社会です。青少年は墮胎と安楽死は正しいと学んでいます。彼らは人間の生命をこのように軽く教えられている。もしそうしたことで人を殺すことができるなら、自分たちの道を邪魔する者を足蹴にして殺してなぜ悪いのか、ということになってしまうのです。」

厚生大臣はこの発言を受け入れ難いとし、発言を撤回するよう求めた。大臣によればこれらの暴力はテレビの影響のせいで、子供たちが何を見るかは両親が責任を持つべきだそうだ。シモニス枢機卿は反対に、悪の原因を自らの領域にも探す。「教会も、社会のこの墮落に一部責任がある。我々はあまりにも世間に妥協しすぎたのではないか。行き過ぎた個人主義に対する戦いを放棄したのではないか。」

今年になって路上の暴力事件が増えているだけでなく、安楽死の適用による死者の数も年々増加している。病人に人工的に食物を与えるのを止める方法も始まった。このケースの最初の事例は、老人ホームでアルツハイマー病の患者に実施されたものである。このようにして死を早めるのである。厚生省の監督官はこの事例が合法的であると判断しただけで

なく、オランダでは年間13万5千人の死亡者のうち、1万人が末期患者に水や食料を故意に与えないことによって亡くなっていると断言した。このような場合、三分の一の人が24時間以内に息を引き取る。マスコミは食物供与を止めてほしいかどうかを決定できない老人の場合、どうすべきかについて議論している。こうした状況で、以前にも何度か生命擁護の立場で政治家にも言いをつけたカトリック教会の責任者の意見が待たれていた。

枢機卿は、誰もが非難する事件（青年の死）と、多くの人々が受け入れる事実（墮胎や安楽死）を結びつけ、マスコミを驚かせた。新聞やテレビは枢機卿に発言の撤回を求めたが、枢機卿は逆に墮胎と安楽死に対する断罪を繰り返し、しかも両者の関係をよりはっきりさせた。すなわち、路上の暴力は安楽死と墮胎を容認する現在の政策の直接の結果ではないが、両者は現代の文化の荒廃を反映している。文化は教育を通して人々の行動に影響を与えるからであるとした。

今年になってオランダで政治家が教会人を喚問するのは二度目のことである。これは、伝統と表現の自由が保障されている民主主義国家では珍しいことである。最初の例はブレダの司教が、極端な窮乏の場合、盗みは罪にならないことがあると言った時である。第三世界のことについての発言であったなら、誰も驚かなかったはずであるが、この発言は総理大臣を苛立たせた。貧しい人を侮辱しているというのである。そのため、司教は喚問された。この事件は非常に有意義な結果をもたらした。すなわち、自国でも貧富の差は解決すべき問題になっていることをオランダの政治家に自覚させ、一部の人々の間にある隠れた貧困により一層の注意を払うようにさせたのである。

(「アセプレンサ」97年10月22日号から)

フランクルの死

97年9月2日、故郷の街ウィーンで、92歳で死去したヴィクトル・エミル・フランクルは、超越的な価値を認める精神療法を創始したが、この学派は今日では世界中に無数の追従者を持つ。「実存分析的精神療法」と名付けた治療法と著書によって、フランクルは何千人もの人を助け、生きる意味を見出すよう導いた。その治療法の成功の鍵は、病人の精神的次元に配慮することである。

25歳で医学博士となったフランクルは、1936年、神経症と精神病の専門医となった。早くからフロイトと接触を持ったが、後に精神分析の学派からたもとを分かち、そしてアドラーの個人心理学に従うが、やがてこの学派からも別れ、独自の道を進む。ユダヤ人であったため、1942年、家族とともにナチスに捕えられる。四つの収容所を経験し、両親と妻を失った。45年に釈放されてからウィーン総合病院の神経科の主任となる。85歳まで同市の大学で教鞭を取った。このほか合衆国の五つの大学で教壇に立ち、世界中を回って講演を行なった。1949年には哲学の博士号を獲得し、29の名誉博士号を受けた。26カ国語に訳された32の著作の発行部数は、全部で数百万部にのぼる。

フランクルは、ノイローゼがすべて性欲を抑えるために生じると考える精神分析学が、許しがたい行き過ぎであると気づいた。彼はノイローゼが肉体的原因に起因することも精神的原因に起因することもあると考えた。そこで患者には適切な薬を与えていた。しかし、フランクルの最大の貢献は精神的な原因によるノイローゼ患者の治療法にある。実存分析的精神療法はこの種の患者に向けられたものである。

彼の治療法は、かの有名な書物『夜と霧』の中で語られる強制収容所での自己の体験から基本的な靈感を得ている。収容所で自分自身と他の収容者を見ているうちに、極限状況におかれた人々の中で、絶望したり動物のようになつたりする者もいれば、反対にそこから最良のものを引き出す者もいることを発見した。そのような状況で人間性を高めることができたのは、より高い目的を持ちながら苦難を忍んだ人々であった。「なぜ生きるのかを知っているなら、どのような生き方も我慢できる」と彼は結論した。

人間は自由な存在であって、人間を動かす根本的要因は快楽の本能（フロイト説）でも権力への野望（アドラー説）でもない。それは意味の欲求である、とフランクルは考える。言い換えれば、人間は「後ろから」衝動に押されて動くのではなく、目の前にある、知性によって知り、自由に受け入れた目的に、

引っ張られて動くのである。

フランクルによれば、人生の意味を発見するために三つの主要な経験がある。人を愛すること、何かの理想に奉仕すること、そして避けられない苦難と対決することである。人間は一つの高貴な賭けのために全存在を向けることができる。自己を忘れ自己のエネルギーを捧げることによって人は幸せになれるが、自分自身に関心を集中させるならノイローゼに陥る。この理由で、彼は合衆国での聴衆に、東部海岸の自由の女神は西部海岸に責任の女神を立てることによって補われねばならないとよく話していた。

このようにフランクルは、どうすれば患者が（たとえ最悪の状況にしよう）生きる責任を自覚することができるかを追及した。そして、人間はその精神性のために苦しみを凌駕する存在であり、それゆえ苦しみの中に意味を見出すことが必要であり可能であるが、反対に苦しみから逃げれば確実にノイローゼに陥ると強調した。「真理は我々を苦しみから解放する。反対に苦しみから自由であろうとするなら、真理に近づくことなどできない相談である。」

人生に意味がなければ、人は「実存的真空」に落ち込む。この「真空」を、フランクルは現代社会に典型的な多くのノイローゼ患者の治療をきっかけに発見した。成功を人生の目的とする人生観や快楽主義的な態度は、目的を忘れて手段のみを見ることを前提とする。そうなる欲求不満は避けられず、それは精神的な不安定を引き起こす。

ある本の中で彼は妻に死なれて全く意気消沈した人の例を紹介している。フランクルはその人の回復のために、苦しみが持つかもしれない意味について説明した。「私は彼に対し、『もしあなたが奥さんより先に死んでいたら、あなたの苦しみを奥さんが味わっていたでしょう。だからあなたは自分が苦しむことで奥さんが苦しまないようにしていると考えられますか』と言いました。それを聞いて彼は苦しみから解放されたわけではないが、少なくとも神経衰弱を引き起こす無意味からは解放されたのです。」

患者が生きる意味を発見することを手助けするために、フランクルは人間を超越する次元に目を向けた。彼は神を信じる人で、聖書とキリスト教についても造詣が深かった。実存的真空を満たすためにどのような価値を強調すべきかという質問に対し、十戒と答えるのが常であった。つまり、「人間が神に背を向ける時、生命をも軽視するようになる。」

（「アセプレッサ」97年11月17日号から）